

全科協

vol.50 *News*
NO.2

2020年3月1日発行 通巻第291号

特集

ICOM京都大会2019報告

CONTENTS

- P2 ▶ 特集
- P10 ▶ 海外博物館事情
- P12 ▶ 3月4月の特別展等
- P14 ▶ ニューオープン情報
- P15 ▶ トピックス

JCSM
Japanese Council of Science Museums Newsletter

全国科学博物館協議会

〒110-8718 東京都台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9898
<http://jcs.jp>

ICOM京都大会 2019 報告

昨年9月1日から7日まで、国際博物館会議(ICOM)京都大会が開催された。

ICOMは世界の博物館の進歩発展を目的とする唯一最大の世界的な博物館の専門組織であり、約140の国・地域に4万人を超える会員を有している。3年ごとに開催される大会は、全世界から博物館に携わる人々が集まり、博物館に関するさまざまなことについて議論を交わし、成果を共有し、さらなる連携を強化する機会となっている。

全科協としては、日本で初めて開催されるICOM大会への関心を深め、参加を促進することを目的として、参加登録料助成制度を設けた。その結果、正会員47館、維持会員1社から75名が全科協の助成を受けて参加した(助成を受けずに参加した加盟館園職員も多数いたことも指摘しておきたい)。

本特集では、ICOM日本委員会の半田事務局長に京都大会の総括をいただいたとともに、CIMUSET(科学技術の博物館・コレクション国際委員会)、NATHIST(自然史の博物館・コレクション国際委員会)の運営に携わった2氏から報告をいただいた。また、助成を受けて参加された方々の中から4氏に、それぞれの視点から報告いただいた。

京都大会では「museum」の定義の見直しについて議論が行われたとともに、各国際委員会においても持続可能な発展等の社会的課題に対する博物館のリーダーシップについてなど、多様な議論がさまざまな場面で行われた。本特集で紹介できたのはその一部にしか過ぎないが、博物館の社会的役割等について幅広い観点から議論が行われた本大会の成果の一端について共有を図ることで、今後の博物館の事業展開や、博物館に関する議論の深化の一助となれば幸いである。

(編集委員 濱田 浄人)

ICOM京都大会から、その先へ

ICOM日本委員会事務局長・日本博物館協会専務理事 半田 昌之

昨年9月1日に開幕した第25回ICOM(国際博物館会議)京都大会2019は、国立京都国際会館を主会場に、120の国と地域からICOM大会史上最大の4,590人の博物館関係者が一堂に会し、博物館を取り巻くさまざまなテーマで熱心な議論を繰り広げ9月7日に閉幕した。この1週間にわたる多彩なプログラムでは、基調講演や全

体会合をはじめ30の国際委員会や地域連合などによって開催されたセッションの総数は231、登壇したスピーカーは1,476人にのぼった。準備段階で心配していた日本からの参加者についても、当初目標に掲げた1,000人の2倍に近い1,886人が参加登録し、ヨーロッパからの参加者数を上回る、全体の41%を占める結果となった。



また基調講演の隈研吾氏をはじめ、それぞれのセッションに登壇・発表を行った日本人は100名を超え、数値的には成功した大会だったと評価できる。

しかし、ここに至る道のりは決して楽なものではなかった。米国のシンシナティを投票で下し京都での開催を決めたのが2015年。当時、日本国内のICOMの個人会員数は186人で、1,500人規模の米国と較べても、とても大会の成功を思い描けるような状況ではなかった。開催決定以来、国内の関係者に日本でICOM大会が開かれる意義を説明しても、ICOMって何？ という素朴な疑問から始まり、日々の運営に苦勞する多くの地域博物館関係者にとって、ICOM大会は「他人事」でしかないのは致し方ないことだった。

こうした状況のなかで大会組織委員会が組織され、京都府、京都市、開催地関係機関、文部科学省、文化庁、国立文化財機構、国立科学博物館、国立美術館、人間文化研究機構のほか、館種組織、関連学会や大学等を巻き込みながら、さらに広い分野の関係機関へと、徐々に大会への理解の輪が広まるなかで、博物館関係者が一体となったICOM京都大会の準備を支える屋台骨が作られていった。

かくしてICOM京都大会は、日本で開催された史上最大の博物館関係の国際会議として歴史に刻まれることとなった。今、大会を終えて振り返れば、資金の調達からボランティアに至るまで、この大会がいかに多くの方々の理解と支援に支えられていたかが実感できる。

さて、7日間の京都大会に思いを馳せると、先ず思い起こされるのはさまざまな場での熱心な議論の様子である。ICOMの博物館定義の見直しに関する臨時総会での

議論は3時間に及んだうえに、案の是非ではなく採決自体が延期されたことをはじめ、国際的な博物館を取り巻く課題や今後の博物館の在り方について、参加者が真摯に取り組む態度は強く印象に残った。これまでの日本国内の博物館に関する会議や学会で、このように白熱した議論が交わされる機会は少なく、多くの日本人にとって新鮮な刺激となったのではなかろうか。

しかし、ICOM京都大会の真価が問われるのはこれからである。「文化をつなぐミュージアム - 伝統を未来へ -」というテーマの下に、喧々諤々議論された先には、大きく変容する地球環境や世界情勢の中で、これからの博物館が果たすべき役割を見出す、という大きな命題が待ち受けている。大会での議論や体験を会場だけの「他人事」で終わらせることなく、国内の博物館全体の議論として広げることができるかが、今、問われている。なぜなら今回、京都で議論されたSDGs、社会的課題の解決、社会包摂、市民参画、人文・自然の連携、文化財の保存と活用、災害への備え、観光政策との連携といった博物館に関する論点は、過疎化、人口減少が進む日本の博物館にとっても、待ったなしで向き合わなくてはならない喫緊の課題なのだから。

ICOM京都大会の成果を一過性のもので終わらせることなく、国内での議論を深めつつ身近な課題の解決に繋げていくこと、そのためには国際的な連携の輪の中で活躍できる次世代を担う多くの若い人材の育成と活躍できる場を確保することが、本大会に携わった我々の責務であると考えている。祭は終わり日本のICOM会員の数も500を超えた。が、その成果を無駄にせず、明日の博物館のあるべき姿を考えるべき時を迎えている。

NATHISTは日本の科学系博物館に何をもたらしたか？自然史博物館の立場から

大阪市立自然史博物館 佐久間 大輔

120カ国4,600人を集めて開催されたICOM京都大会は日本の科学系・自然系博物館に何をもたらしたのだろう。私自身はどうしてもNATHISTに集中しての参加となったために、全体を俯瞰する視点を持っていないのだが、現状での感想をまとめさせていただく。

NATHISTだけでも講演とポスターを合わせて48題の発表をいただいた。記念写真を見ても参加者の多様性がわかるだろう。どのような発表がなされたのか、文末にプログラムへのリンクと要旨へのリンクを示した。

社会に関与していく博物館

全科協やJMMAなど、日本国内の博物館関係者間でも博物館活動に関する議論を行うときはある。しかしこれらとICOMでの議論を比較したときに強く印象的であったのは、大きな課題、グローバルな課題への意識が強いことだった。地球温暖化や生物の多様性に向き合おうとする博物館、社会の課題を博物館の活動の中に取り込もうとする博物館の姿が各所に現れていた。これはもちろん、発表の場が国際会議であったということは割り

引いて考える必要がある。海外の博物館関係者に通じる活動が紹介された、とも捉えられるだろう。しかし、それができるのは日常から視点を持っているからでもある。例えば正月の食材から世界の海の生物資源と輸出入を語った台湾の発表や、温暖化をアーティストともにいかに伝えるかに取り組んだアイスランドの事例など、興味深い発表が続いた。移住者のエスニックな植物利用と外来雑草の関係など、日常の活動の中に、世界を見据える視座と、世界を伝える意思がないとこのようなプログラムは成立しないだろう。例えば外来生物を伝えるときに、日本でのその生き物の姿や被害だけでなく、その向こうの世界を伝えているだろうか。地球温暖化や生物多様性を私達の解決すべき日常の問題として伝えているだろうか。それとも科学的な知識としてのみだろうか。

NATHISTの基調講演として最初に講演をいただいたH. McGhie氏の講演は示唆に富んでいた。同氏の英国での調査によれば、政策形成者を含む生物多様性関係者は自然史標本が生物多様性保全に関わる多くの課題の探求に、「貢献している」、または「貢献しうる」と考えている、というものだった。生態系機能の回復や温暖化の影響確認など、さまざまな項目で評価する回答が軒並み8割を超えたという。自然史標本は同様に地球温暖化をはじめとするSDGsの多くの課題にもまた、たくさんの「手がかり」を提供できる。自然史博物館は環境課題にもっと貢献できる。政策形成者と博物館とがもっと密接に連携すればよいだけの話だ、と氏の論考は述べている。

実際に政策形成者と博物館が協調して活動するには、成功の実績と信頼を積み重ねなければならない。そして、博物館が提供できる手がかりを実際の政策に結びつけていくためには、ステークホルダーとの連携だけでなく、市民の合意を背景とした調査提言などアドボカシー（政策立案）的な役割も必要とされるだろう。現在の陣容の



博物館でそうした新たなタスクをどこまで担えるのか。課題も多いことも現実だが、NATHISTに限らず、ICOMの掲げる理想は「社会に関与していく博物館」であると強く感じた。

しばしば公立博物館は政策的議論になる課題を取り扱うことを避けたがる。しかし、上記のような地球環境問題の解決に向けた社会変革にまで立ち入る場合、「中立」は幻想あるいは消極的立場でしかない。生物多様性を巡る保全科学や、気候変動に対して専門性を持った独立の立場からどのように責任のある発言をしていけるのか。専門性を持って語り、あるいは自らの専門性で他の専門家の意見を判断して紹介できる学芸員の責任が大きくなる。それはまた、学芸員が専門性を磨く必要も要求している。これもまたICOM全体の議論の一端であった。

博物館はまた、社会の中で議論の場となり、地域での合意形成を行っていく上でも重要な役割を担うとの指摘もあった。そのためには、展示や教育活動を社会の課題を見越し、さらにはその向こうの世界に通用するスタンダードまでを見通して、しっかりと組み立て直していくことも必要だ。

博物館という共通基盤

社会的背景も財政事情も違う異国の博物館の事例を聴く中で、それでも自分の博物館にひきつけて考えられる材料がたくさんあったというのは興味深い事実だ。博物館という伝え方、探求の仕方、保存する使命が共通のものとして我々の間に横たわっていたことを感じる。それは科学を伝えるものとしての社会との向き合い方だったり、あるいは社会が抱える問題の把握の仕方であった。社会に新たにもたらされた知識や技術と社会とのつなぎ方、来場者や参加者の主体的な学びを支援する方法などのなかに博物館人として共感する部分があった。社会の課題を取り上げて展示することは、日本でも古くから啓蒙的に行われていたことではあるが、現代では課題そのものを上からではなく、より社会の中に探る形になっているだろう。博物館から答えを提示するのではなく双方向的な議論の中で来場者・参加者の合意を探していくワークショップ的な活動もめだつ。実はこうしたことが、新たな「博物館の定義」として提示されていたものである。当たり前だが、博物館の定義は会議の中から文章として生み出されたものではなく、各地で模索された実践の中から抽出された。現代の世界の博物館が求めているあるべき姿の結晶として提示されたものであった。今後、

6月のパリでの総会やその後のプラハ大会などでどのような形で決着していくのか、注目が必要だ。

実際に地球規模の環境課題の解決に博物館が役割を担うためには、学芸員は海外の状況にしっかりアンテナを張り、世界的な視野で目の前の日常を分析する事が必要になる。こうした作業は、研究者としての視点でもある。生物の研究をするときにそのグループの最新の分類体系や関連するさまざまな近年のトピックを意識しているのと同様、教育や展示活動を準備するために、その課題に関連する「世界の動向」を意識しておくことになるのだ

ろう。そのとき、学芸員は単なる研究者ではなく、博物館という場所におけるSDGsのコーディネータとも言える存在になるのだろう。

NATHISTプログラム

http://www.naturemuseum.net/blog/NATHIST2019_final_programme.pdf

講演論文 (QRコードでリンクしている)

https://omnh.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=257



ICOM京都大会におけるCIMUSET (科学技術の博物館・コレクション国際委員会) に参加して

国立科学博物館 前島 正裕

ICOMの大会が日本で行われることになったため、小職は科学技術の博物館・コレクション国際委員会であるCIMUSET (ICOM International Committee for Museums and Collections of Science and Technology) のお手伝いをする機会を得た。CIMUSETはICOM傘下の国際委員会のひとつで、主に科学や技術に関する展示を持つ博物館の中堅Curatorが参加している。毎年総会を開催しており、2018年はカナダのオタワで、2020年はイランのテヘランで開催の予定である。今回、発表の申込みは50件以上あったが、一件当たりの時間を十分に取りたいということで、発表者は各国1件、日本は開催国ということで2件に絞られ24件の発表が採択された。実際はキャンセルがあり22件となった。講演要旨は後日刊行される予定なので、本稿では簡単な印象を述べるに留める。

今回のCIMUSETのテーマは京都大会でのキーワードのひとつである“Sustainable Futures”を受けて、“Voices of Traditions for a Sustainable Future” (持続

可能な未来に向けた伝統の声)であった。初日は発表は、ICOM GermanyのCEOであるKlaus STAUBERMANN博士による基調講演「From Material Culture to Maker Culture: How science and technology museums bring the past to life? (物質文化からものづくり文化へ)」で始まった。彼は博物館資料である「モノ」それ自体に対する調査の重要性を認めつつも、現代の博物館は大胆に活用方法を見直し、“Sustainable”の視点から「モノ」そのものに関する調査や展示から「モノづくり」に焦点を当てた活動にシフトすべきであると提言した。

続いてSession 1として、「New Museums Concepts & Roles (博物館の新たな概念と役割)」をテーマとして、モロッコのEch Cherki DAHMALI氏による司会で、ブラジル、ハンガリー、デンマーク、カナダ、イランの五カ国からの発表が行われた。DAHMALI氏はCIMUSETの委員長で、2017年にモロッコのラバトでCIMUSETの会合が行われた時のホストである。2日目は3つのSessionが行われ、Session 2では「Engaging Audiences (魅惑的な科学博物館をめざして)」をテーマとして、フィンランドのJohanna VÄHÄPESOLA氏の司会で、イスラエル、日本 (札幌市青少年科学館)、韓国からの発表が、Session 3では、「Sustainable Museums (科学技術遺産と持続可能性)」をテーマとして、ドイツのHartwig LUDTKE氏の司会で、台湾、フランス、スロベニアの3件の発表が、Session 4では、「Communicating Ecology and Natural Science (エコロジーと自然科学の科学コミュニケーション)」をテーマとして、フランスのJuliette RAOUL-DUVAL氏の司会で、タイ、日本 (滋



会議風景 (国立京都国際会館)

賀県立琵琶湖博物館)、スロバキア、米国、中国の5件の発表があった。3日目のSession 5は「Sustainable Heritage (科学技術遺産と持続可能性)」をテーマとして、クロアチアのMarkita FRANULIC氏が司会をして、フィンランド、インド、ポーランド、メキシコ、イタリアから5件の発表があった。

今回CIMUSETの会場は、連日ほぼ満席となり関心の高さをうかがわせた。各館の発表内容は、博物館に求められる活動が時代とともに変わる中、それぞれの館における最近の展示・普及活動の紹介が多かったが、建設中のカナダingeniumの収蔵展示館や計画中の上海Planetarium and Astronomy Museumなど新しいコンセプトの大規模館の紹介もあった。大方の発表者の関心は、博物館の展示や普及活動であったように思える。加えて今回は技術遺産もテーマであったことから、資料担当者との共同発表も数件あった。フランスやイタリアの博物館だけでなく、東欧やイランなど各館のスライドに登場した古い歴史資料は素晴らしいものが多く、それらを調査し保存してきた先達の業績を基盤として新しい活動が成り立っていることを、改めて感じた次第である。会議を通して印象に残ったことは、発表後の質疑応答を通じて必ず全員で認識の共有を図ったことである。各国それぞれ諸事情はあれど、博物館活動の課題に対する認識、課題に対するアドバイス、各発表から各自がそれぞれ得た事などについて共有に努めた。

3日目の研究発表終了後にCIMUSET総会及び理事会の会合が行われ、新理事会メンバーなどが決定した。

委員長は引き続きDAHMALI氏となった。

その夕刻、京都中心部の木屋町にある和食レストランで、合同の夕食会を持った。会場となった場所は、角倉了以の別邸跡で、角倉親子によって江戸時代初期に開削された運河である高瀬川が隣を流れ、向かいには島津創業記念館もある場所である。日本食文化や日本庭園の美に加え産業技術史にも触れることができることから選定された。

4日目のオフサイトミーティングは、50名以上の参加者で名古屋市科学館とトヨタ産業技術記念館を見学した。両館では特別のプログラムを用意していただき、名古屋市科学館ではプラネタリウムのメンテナンス・プログラムの実演や放電、低温などの体験コーナーを堪能した。参加者はほとんどが博物館関係者なので、展示制作者としての視点から、日本らしく細かい所までこだわった展示に感心していたようである。トヨタ産業技術記念館では、副館長お二人による英語のガイドツアーによって、多種の繊維機械の動態展示、冶金の実演、大型プレスの動態展示などを興味深く拝見した。これらの機械を常に動態で維持することの困難さについて、参加者も日ごろから苦労しているため認識も深く、強い印象を受けたようである。この見学がきっかけとなり、同館はCIMUSET理事会から2020年2月にパリで開催されるCIMUSET - CIMCIM合同シンポジウムでの講演を依頼された。最後に改めて名古屋市科学館及びトヨタ産業技術記念館の多大なご協力に感謝する次第である。

小規模博物館の学芸員がICOMへ参加して感じたこと

きしわだ自然資料館 平田 慎一郎

私がICOMを認識するようになったのは博物館に関わるようになった20年ほど前のことですが、どういう活動を行っているのか興味は持っていたものの、日常業務での関わりはほぼありませんでした。京都大会には全科協からの参加費補助を受け、9月2日と3日の2日間参加しましたが、世界の博物館の現状を知る絶好の機会として、期待を持って臨みました。

大会期間中に行われた国際委員会のうち、私がおもに参加したのはICR（地方博物館国際委員会）のセッションでした。職階的に館の運営を総合的に考えなければならない立場であり、また個人では小規模博物館ネット

ワーク（小さいとこネット）の世話人もしていることから、「文化・自然遺産の持続可能な利用を促進する地域博物館」というICRのテーマへの関心が大きかったのです。

セッションでは世界各地のさまざまな事例が報告されましたが、やはりテーマ的にも地域の文化やコミュニティの形成、持続可能な発展といった社会的な課題に地域博物館が果たす役割を議論する講演が多かったのが強く印象に残りました。地域との関わりは自分の施設でも常に意識しており、設置自治体のさまざまな部署や地元NPOと連携するなど実務的な取り組みは進めています。しか

し、その効果の体系的な検証はできてはおらず、より大きな社会的課題へのコミットも十分できているわけではありません。世界の潮流を目の当たりにし、やはり自館も社会的課題の解決に資する内容を事業にもっと採り入れてゆかねばならないとの意を強くしました。

個人では、5日に大阪市平野区で行われたオフサイト



2019年9月2日に行われたICRセッションのようす

ミーティングにも運営ボランティア的な役回りで参加しました。これはICRと日本エコミュージアム研究会の共催で行われたもので、午前中が新聞配達所やお寺の地獄めぐりなど「平野・町ぐるみ博物館」の見学、午後からは地域の中心にあるお寺のホールでのセッションでした。大阪にいながら平野の取り組みのことはまったく知らなかったのですが、町めぐりでの案内・対応や昼食、夕食の手配のほか、セッション終了後にはだんじりが登場し、吹奏楽が演奏されるなど、地域住民による全力の歓待がとても印象的でした。海外からの参加者もおおいに楽しんでおられたようです。

今回ほどの規模の国際会議に参加したのは学生時代も含めて経験がなく、博物館という日本ではどちらかというマイナーな分野でこれほど多くの人々が活発に議論する場に身を置くことができたのは、今後の学芸員生活にもプラスの効果をもたらさそうです。これから館の運営に関して行政側と交渉する際には、今回得た経験と世界の博物館情勢をふまえ、自信を持って臨みたいと思います。

世界の大学博物館の知が古都京都に集結して

東京農工大学科学博物館 棚橋 沙由理

2019年の初秋、第25回ICOM（国際博物館会議）京都大会が盛大に開催された。筆者は、30の国際委員会のうちUMAC（International Committee for University Museums and Collections, 大学博物館・コレクション国際委員会）の第19回大会に参加し、研究発表をおこなう機会を得ることができた。その模様を報告する。

UMAC大会のセッションは9月2-5日の4日間にわたり開催され、大会のテーマはICOM京都のテーマになぞらえて「University Museums and Collections as Cultural Hubs: The Future of Tradition」とされた。各セッションでは大学博物館を取り巻く現代的な課題について、それぞれの国内的あるいは国際的な視点から活発な議論が展開された。ここでは、大学博物館における実務にもとづく事例研究が基礎をなしていたが、あくまで理論に立脚した実践が重要視されていた。世界の大学博物館の取り組みはじつに洗練されており、コレクションの継保存および教育普及に対する機関ごとのフィロソフィを強く感じ取ることができた。筆者は自らの口頭発表において、理工系大学の特色にもとづき大学の擁す

る豊富な研究人材ならびに恵まれた教育・研究環境を十分に活用した博物館活動を紹介した。発表後に挙げられた複数の質問のうち、子どもを対象とした活動について「子どもたちを『将来の学生』と捉えていることから、次世代を対象とした活動を非常に重要視している」とい



UMAC Tokyo Seminarにて

う筆者の回答に対し、広く賛同を得ることができた（大変印象的な瞬間であった）。その後の休憩時間には、国内外の参加者同士でそれぞれの館のコレクション事情や博物館教育のカリキュラムについて情報交換をおこない、有意義な歓談の時間を過ごすことができた。

また上述のUMAC大会の翌週、ポスト・カンファレンスとして「University Museums as Cultural Commons: Interdisciplinary Research and Education in Museums」をテーマに掲げたUMAC Tokyo Seminarが、9月9、10日の2日間にわたり慶應義塾大学（東京都港区）にて開催された。異なる文化に根ざした知識や人々の交流を生起させる大学のミュージアムについて、多様な議論

がなされた。なかでも大学ミュージアムにおけるモノを介した教授法Object-Based Learning (OBL) は大学博物館ならではの特色を活かした旧くて新しい画期的な取り組みとして、わが国でも今後広がる兆しである。筆者はこちらでも「New challenge of the museum in Tokyo tech, a science and engineering university」というタイトルでポスター発表をおこなった。

むすびに、世界の理工系大学博物館の職員と人脈を構築することができたのは、筆者にとり望外の幸であり大きな収穫であった。プラハ大会を見据え、さらに発展的な議論に参加できるよう研鑽を積みたい。

ICOM京都大会2019への協力と委員会セッション参加

京都鉄道博物館 岡本 健一郎

2019年9月1日～7日の日程で開催されたICOM京都大会において、開催地京都に所在する当館では、①パス提示による関係者の無料入館、②オフサイト・ミーティングの会場提供、③開催記念イベントを冠した催事実施の協力をおこなった。事前の盛り上がりは充分とはいえないのでは？と案じていたが、期間中に当館だけでも137名の関係者が無料入館された。また、MPR（マーケティング・交流国際委員会）のオフサイト・ミーティング会場として無償提供し、9月5日の当日には当館職員も聴講させていただいた。

次に、9月4日に大会参加させていただいたなかから、メイン会場で開かれた各委員会のセッションのうち、CECA（教育・文化活動国際委員会）「社会正義のための博物館教育」及び「博物館の可能性」の報告をする。「社会正義のための博物館教育」では、世界各国が抱えているさまざまな社会的な問題に対し、博物館がどのよ

うにアプローチできるのかが主題となった。アルゼンチンのロサリオ市博物館の報告は、人権尊重のために2011年以來の民主化等人権問題をテーマとした取り組みを紹介し、来場者に対し、奴隷や移民などの歴史の紹介とともに、現在の姿を知り、考える機会を提供することが博物館教育の意義であると主張された。加えて、差別や外国人排除などの写真展を開催し地域コミュニティのニーズに応える役割を果たすことができた一方で、差別等の解消には住民の力が必要であり、そのために歴史と現状を知ることができる博物館教育が必要である点が強調された。また、ディスカッションの中で、文化遺産を預かる役割を持つ博物館が、平和や民族対立などの諸問題に対して、市民活動とともに、さまざまな暴力等に対し声を上げていく必要があることが共有された点が印象的であった。

引き続きおこなわれた「博物館の可能性」では、博物館の展示を来場者へ何をどのように伝えるかという、根本的な問題が主題となった。最初に、これまでの戦争記念展では白人偏重の視点や、女性の関わりについて視点が薄いなどの反省のうえに立ち、文化の多様性を博物館の展示にどのように活かすのかがディスカッションされた。つぎに、展示デザインの教育的役割も重要視され、観覧者が展示から何を学び、何を知らるかを引き出す役割が展示デザインにはあり、教育・デザイン・キュレーターの3者の協力によって、展示内容の深い理解をうながし、時代や文化財への理解も深まることが強調された。



今回のセッション参加を通して、博物館の教育・文化活動の重要性について、博物館の立場は社会的背景に左右される面もあるが、キュレーターの立場では、文化遺

産をもとに歴史的事実に真摯に向き合い、それを紹介し、来場者への理解を求める点にあることを再認識できたことが有意義であった。

全体 セッション

「被災時の博物館—文化遺産の保存に向けた備えと効果的な対応」報告

南阿蘇ルナ天文台 武藤 祐子

2005年に設立したICOMの災害リスク管理委員会は、新たな国際委員会「博物館防災国際委員会」として本大会で再編された。9月4日の全体セッション「被災時の博物館」では、国際委員会メンバーの4人が登壇し、各登壇者の事例発表の後、全員によるディスカッションの形式で本セッションは行われた。

最初の発表者、ICOMブラジル委員長のレナータ・ヴィエラ・ダ・モッタ氏は、2018年9月に発生したブラジル国立博物館の焼失により、2,000万点に上る所蔵品のほとんどが焼失したことを事例として取り上げた。この時の火災の原因は電気系の故障とされており、「人的災害は適切なメンテナンスを行う事でリスクを低減できるはずだ」と述べた。

続いて、2017年に『ハリケーンイルマ』と『ハリケーンマリア』の2つの大規模ハリケーンによって大きな被害を受け被災したプエルトリコのポンセ美術館が紹介された。アレハンドラ・ペーニャ・グティエレ館長によると、時速115マイルに達するハリケーンの被災後、わずか一週間で再開館を実現。しかしながら当時、橋や道路は壊滅的で通信も途絶え、ラジオでしか情報を得ることができず、約4週間もの間、孤立が続いたという。通信断絶時への備えが必要であると話した。

防災への備えに言及した2つの話題に続き、ユネスコによって設立された「文化財保存修復研究国際センター」のアパルナ・タンドン氏は、「博物館施設が防災計画に

入っていないと、大規模災害が起きたときに文化財保護は優先されない。文化財のレスキュー方法も不明となり、その対応は寄付ベースとなってしまおう」と、博物館が防災計画に含まれていないことに警鐘を鳴らした。

その後、仙台の防災活動が紹介され、最後のディスカッションでは、文化財の専門家と被害対応の専門家の間をつなぐことの重要性和それぞれの災害対応のガバナンスの必要性について議論が進み、本セッションが締め括られた。

当館の位置する南阿蘇村は、2016年熊本地震で震度6を二度経験している。幸いにも建物や巨大な天体望遠鏡の倒壊こそ免れたが、建物の無数のヒビやゆがみ、天文台ドームの駆動系などに大きな損傷を受けた。また、交通インフラが深刻なダメージを負ったことで地域経済が大打撃を被ったことや、被災した中核スタッフの生活環境の変化もあり、初期の施設運営には難しい判断が数多く求められた。特に、人的・物的災害の恐怖もさることながら、長期的な施設利用者の激減を招く地震報道による風評被害という二次災害への対応に長く苦慮することとなった。震災から間もなく4年を迎えるが、地域は未だ復旧・復興への道半ばにあり、当館もまた例外ではない。

近年発生したノートルダム火災、そして日本での10月の首里城の火災から、一般に広くリスク管理の重要性が叫ばれるようになったが、文化財の保護はこれまでになく緊急の課題となっていこう。



世界に、歡びと感動を

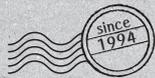


株式会社 乃村工藝社
本社 東京都港区台場2-3-4 TEL: 03-5962-1171 (代表)

ここを動かす空間をつくりあげるために。
調査・企画、デザイン・設計、制作・施工、運営



空間創造のプロフェッショナル 株式会社 丹青社
〒108-8220 東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス19F
TEL|03-6455-8100(代表) URL|www.tanseisha.co.jp
札幌・仙台・新潟・名古屋・京都・大阪・福岡・那覇・上海



■ 新設館

津波博物館が、タイで開館へ(2021年予定)

2021年の開館をめざして、インド洋に面したタイのバンガー県で、津波博物館の整備が進められている。

2004年12月26日に発生したスマトラ島沖地震にともなった津波で、インド洋に面したタイの沿岸地域は壊滅的な被害を受け、新しい施設の建設地であるバンガー県も、広範囲にわたって津波による甚大な被害を受けた。

バンガー県バーナムケム村にできる新しい施設「バーナムケム津波記念博物館」は、スマトラ島沖地震による津波の記憶を次の世代へつなげることが、整備の目的となっている。予算の不足や人員の確保に困難があったが、地震が発生した日付の前に、建物がなんとか完成した。新しい施設の常設展示では、津波によって村の住宅地まで押し流された漁船の静態保存展示が設けられる計画だ。展示では、当時の様子を紹介した映像や遺物で、津波に被害の状況が紹介されることになっている。また津波が発生するメカニズムの紹介と津波への備えの啓蒙普及にも力を入れることになっている。

建物にも大きな特徴があり、新たな津波の発生に対応し、ひとりでも多くの人を助けるために、避難塔も建物の上部に設けられることになっている。

Ban Namkhem Tsunami Memorial Museum, Ban Namkhem Village, Phang-nga Province.

スエズ運河国際博物館が、エジプトで開館へ(2020年予定)

2020年夏の開館をめざして、エジプトのスエズ運河沿いの町イスマイリヤ(人口:36.7万人)で、スエズ運河開通150周年記念として、スエズ運河国際博物館の整備が進んでいる。スエズ運河庁が主導している新しい施設は、スエズ運河庁の本部がかつて置かれていた建物(1863年完成)に設けられることになっている。常設展示では、1869年に開通するまでの10年の工事期間と、現在に至るまでの建設の歴史を紹介することになっている。

Suez Canal International Museum, Ismailia.

<https://egyptindependent.com/egypt-initiates-project-to-establish-suez-canal-international-museum>

<https://www.dailynewssegyp.com/2013/04/08/suez-canal-authority-building-to-become-international-museum>

http://www.xinhuanet.com/english/2019-11/19/c_138565085.htm

■ 常設展

レオナルド・ダ・ビンチ常設展示ホールが、ミラノ国立科学技術博物館にオープン

2019年12月10日に、イタリア北部のミラノ(人口:314万人)にあるミラノ国立科学技術博物館(1953年開館)に、レオナルド・ダ・ビンチの偉業を紹介した常設展示ホールが、レオナルド・ダ・ビンチ没後500周年記念としてオープンした。1,300㎡の広さをもつ展示ホールでは、レオナルド・ダ・ビンチが制作した模型の実物170点の他に、古文書や彼のデザインをもとにあらたに制作した展示物などが紹介されている。

Gallerie Leonardo da Vinci.

Museo Nazionale Scienza e Tecnologia, Milano.

<http://www.museoscienza.org/english/leonardo/progetto-leonardo-galleries.asp>

<https://www.yesmilano.it/en/whats-on/all-events/new-leonardos-home>

「風+太陽光:再生可能エネルギーの革命」展が、米スケネクタディ科学博物館にオープン

米国ニューヨーク州中部のスケネクタディ(人口:6.5万人)にある、「イノベーションと科学の博物館」で開催された特別展「風+太陽光:再生可能エネルギーの革命」(2017年6月12日~2018年8月31日)が、閉幕せず常設展としてオープンした。同展では、再生可能エネルギーとしての風力発電と太陽光発電の可能性が紹介されている。GEリニューアブル・エナジー(米ゼネラル・エレクトリックの関連会社)の協賛で制作された。電気機械工業の中心地であるスケネクタディには、ゼネラル・エレクトリックの本社が置かれている。

Wind + Solar - The Renewable Energy Revolution.

Museum of Innovation and Science, Schenectady, NY.

<https://www.misci.org/exhibit/wind-solar-renewable-energy-revolution/>

■ 企画展・特別展

写真展「気候変動」が、ヴェローナ自然史博物館で開催

2018年10月6日から2019年1月13日まで、イタリアのヴェローナ(人口:92.2万人)にあるヴェローナ自然

史博物館で、気候変動をテーマとした写真展「日々気候変動」が開催された。同展では、世界を舞台に活躍した写真家による作品（70点）で、気候変動による環境破壊の進行や人々と動物の苦しみを紹介している。また観る人に危機感を訴えつつ、日々の生活の中で個人に何ができるかを提案している。作品を出品した写真家は、ジェームス・ウィットロー・ディラーノ（James Whitlow Delano）、ニナ・バーマン（Nina Berman）、マイケル・ロビンソン・チャベス（Michael Robinson Chavez）、ギデオンのメンデル（Gideon Mendel）、マシュー・ペイリー（Matthieu Paley）、ジェレミー・サットン＝ヒバート（Jeremy Sutton-Hibbert）ほか（計27名）。主催者：ヴェローナ自然史博物館 + スカヴィ・スカリジェリ国際写真センター（ヴェローナ）企画：リヴィア・コルボ（Livia Corbo）+ マルタ・カノーニ（Marta Cannoni）

Everyday Climate Change - Fotografare il cambiamento climatico.

Museo di Storia Naturale di Verona.

<https://museodistorianaturale.comune.verona.it>

<http://www.veronaserait/eventi/museo-storia-naturale-mostra-fotografia-everyday-climate-change-2018-2019.html>

<https://vimeo.com/139655257>

<https://www.instagram.com/everydayclimatechange/>
写真展「樺の囁き」が、フィンランド森林博物館で開催

2019年9月16日から2020年1月12日まで、フィンランドのプンカハリユ（人口：3,700人）にあるフィンランド森林博物館で、フィンランドの国樹と呼ばれている樺（かば）を写した写真展が開催された。出品作品は、いずれもハンガリーの写真家ヨーゼフ・ティマール（Jozsef Timar, 1956年ブダペスト生まれ）がフィンランド各地で写したものであり、ティマールが著した同名の写真集（2014年刊）に所収された作品から選ばれたものである。

Suhisevat koivut（英：Whispering Birches）.

Finnish Forest Museum, Punkaharju.

<http://www.lusto.fi/nayttely/suhisevat-koivut/>

「地の果ての恐竜」展が、プエノスアイレスのリバダビア自然科学博物館で開催

2019年12月14日から2020年3月31日まで、アルゼンチンの首都プエノスアイレス（人口：290万人）にあるアルゼンチンのベルナルディーノ・リバダビア自然科学博物館で、「地の果て」と呼ばれている南アメリカ大陸の南端、すなわち南部パタゴニア地方で発見

された恐竜を紹介した展覧会が開催されている。

白亜紀が終わる頃、アルゼンチンの南部パタゴニアは、生物多様性が豊かな地域だった。サンタ・クルス州のエル・カラファテ市の南部やチョリリヨ層からは、ありとあらゆる植物化石と動物化石が発見されている。中でも2種類の新種の草食恐竜「ヌロティタン・グラシアリス」（竜脚類）と「イサシクルソル・サンタクルセンシス」（鳥脚類）が発見されたばかりであり、これらはベルナルディーノ・リバダビア自然科学博物館で開催中の「地の果ての恐竜」展で紹介されている。Los dinosaurios del fin del mundo.

Museo Argentino de Ciencias Naturales Bernardino Rivadavia, Buenos Aires.

<http://www.macnconicet.gob.ar/event/los-dinosaurios-del-fin-del-mundo/>

自転車デザインの最前線展が、米アトランタのデザイン博物館で開催

2020年6月7日から9月27日まで、米国ジョージア州の州都アトランタ（人口：48万人）にあるデザイン博物館で、自転車デザインの最前線を紹介した特別展「Bike to the Future」が開催される予定だ。同展では、フランスのフィリップ・スタルク（Philippe Starck）がデザインした電気自転車をはじめ、ベルギーのトビアス・ノッカー（Tobias Knockaert）のレーザー切断技術を使った自転車や、斬新なデザインをもったアクセサリーなどが紹介されることになっている。企画・制作：ベルギーのヘント市にあるデザイン博物館（2016年3月25日から10月23日まで同展を開催）

Bike to the Future.

Museum of Design, Atlanta, GA.

<https://www.museumofdesign.org/futureexhibitions>

<https://www.designmuseumgent.be/agenda/bike-to-the-future>

<https://www.inexhibit.com/marker/design-museum-gent-bike-to-the-future/>

■ 短信

ワシントンDCのニュースとジャーナリズムの博物館「Newseum」（1997年開館）が、11年続いた経営難により、2019年12月31日に廃館。

<https://www.newseum.org/>

<https://www.smithsonianmag.com/smart-news/dcs-newseum-closing-its-doors-end-year-180973274/>

3月4月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
札幌市青少年科学館	春だ!わくわくサイエンス!	3月26日～4月5日
釧路市こども遊学館	春休みイベント	3月25日～4月5日
岩手県立博物館	化石の水族館	3月14日～5月6日
仙台市天文台	創作神話「そらのくじら」原画展	3月2日～3月31日
山形県立博物館	第2回やまはくセレクション展	3月7日～5月24日
福島市子どもの夢を育む施設 こむこむ	春の企画展 ふれあい小動物の森	3月14日～3月31日
ふくしま森の科学体験センター	「きも～い展」&「春でもカブクワ展」	3月7日～4月5日
郡山市ふれあい科学館	ハワイエ企画展「オーロラ写真展」	1月11日～4月5日
	スペースパーク企画展「ロボットで遊ボット!」	3月24日～4月5日
	ハワイエ企画展「太陽系の惑星たち」	4月11日～6月30日
産業技術総合研究所 地質標本館	地質標本館 特別展 「GSJのピカイチ研究-2019年のプレスリリース、主な研究結果より-」	3月10日～4月26日
ミュージアムパーク茨城県 自然博物館	第77回企画展 さくら展-まだ見ぬ桜(きみ)に逢いに行く-	2月22日～6月7日
栃木県立博物館	テーマ展「おじいさんやおばあさんの子どもころの暮らし」	2019年12月14日～4月5日
	テーマ展「中世下野の歴史物語の世界 -「玉藻前草子」と幸若舞曲「信田」-	2月22日～4月5日
	テーマ展「栃木の海と貝塚」	2月22日～4月5日
	テーマ展「骨が語る動物の秘密」	3月14日～6月14日
千葉市科学館	企画展「スペースミッション 2020～千葉が宇宙の第一歩!～」	Part1: 3月20日～4月5日 Part2: 4月18日～5月17日
国立科学博物館	企画展 ボタニカルアートで楽しむ日本の桜 -太田洋愛原画展-	3月14日～4月12日
	特別展 和食 ～日本の自然、人々の知恵～	3月14日～6月14日
	企画展 「時の記念日」100周年企画展 「時」展覧会 2020	4月21日～6月21日
郵政博物館	世界切手展	2月22日～4月5日
	東海道と旅	4月18日～6月7日
地下鉄博物館	地下鉄におけるパブリックアート展～地下のオアシス紹介?!～	3月10日～4月19日
たばこと塩の博物館	隅田川に育まれた文化 浮世絵に見る名所と美人	2月29日～4月12日
多摩六都科学館	カラダで実験、アタマで納得!ロクト運動サイエンスパーク	3月20日～5月6日
三菱みなとみらい技術館	企画展「なるほど!!カガクまつり-遊びながら原理を学ぶ-」	3月4日～4月6日
神奈川県立 生命の星・地球博物館	令和元年度企画展「 Gondwana ～岩石が語る大陸の衝突と分裂～」	2月29日～5月10日
新江ノ島水族館	桜満開のジャンプ水槽	3月2日～4月12日
	テーマ水槽「卒業旅行～憧れのビーチリゾートへGo!」	3月2日～4月12日
	クラゲショー「海月の宇宙～春～」	3月2日～4月12日
	特別展示「たまご展」	3月4日～4月12日

開催館	展覧会名	開催期間
平塚市博物館	空を見上げよう 光と色の不思議	3月20日～5月6日
福井市自然史博物館	春季企画展「大地を彩る石-煌めく鉱物の世界-」	3月20日～5月31日
世界淡水魚園水族館 アクア・トトぎふ	ブラジル・パンタナール大湿原 アマゾンを超える水の楽園 ～第2章 残された森～	2019年12月14日～4月12日
中津川市鉱物博物館	第25回企画展「日本列島大分析! 元素で見る『地球化学図』」	3月20日～5月31日
月光天文台	特別展「地球史でたどる伊豆半島」展	3月1日～5月31日
	企画展「世界の暦・カレンダー2020」展	3月1日～5月31日
ふじのくに地球環境史 ミュージアム	企画展「大絶滅-地球環境の変遷と生物の栄枯盛衰-」	2019年11月30日～4月5日
	トビックス展 「絶対に訪ねたくなる浜名湖 ～湖をめぐる自然とヒトの面白い攻防～」	2月11日～4月5日
	企画展「消えゆく隣人-静岡県版レッドリストの絶滅危惧種-」	4月25日～8月23日
静岡科学館 る・く・る	る・く・る 春の実験まつり	3月20日～4月5日
東海大学海洋科学博物館	海のはくぶつかん 写生大会	3月25日～3月27日
碧南海浜水族館	「お魚漢字検定」-これであなたもお魚漢字博士-	3月20日～5月10日
名古屋市科学館	マンモス展 ～その『生命』の過去と未来～	3月14日～6月14日
真珠博物館	2020年度真珠博物館企画展「真珠と想像力～ひとは真珠に何を想ったか。～」	4月18日～2021年4月4日
キッズプラザ大阪	春の企画展2020 キッズ忍者まつり	3月22日～4月5日
大阪市立自然史博物館	特別展「知るからはじめる外来生物 ～未来へつなぐ地域の自然～」	3月1日～5月31日
きしわだ自然資料館	恐竜の島	3月8日～3月28日
伊丹市昆虫館	企画展「伊丹の自然」	1月4日～4月6日
明石市立天文科学館	マンホール(地上の星)展	2月1日～4月5日
鳥取県立博物館	特別移動展示 「変わりゆく郷土 写真で見るとっとり 1968-2018」鳥取県立博物館会場	2月8日～3月8日
倉敷市立自然史博物館	特別陳列「新着資料展<総合>」	3月7日～4月5日
	特別陳列「新着資料展<チョウ・ガ>」	4月18日～5月24日
広島市交通科学館	春季企画展「はたらくラジコン」	3月6日～5月6日
山口県立山口博物館	テーマ展「空の不思議な写真展-空に見えた珍しい光景-」	2月11日～3月22日
	テーマ展「自然の美-植物画でみる日本を彩る花-」	4月24日～5月24日
徳島県立あすたむらんど 子ども科学館	第42回企画展「お絵かき文房グー!」	3月14日～4月5日
e-とびあ・かがわ	e-とびあ・かがわ 春の文化祭2020	3月20日～4月5日
愛媛県総合科学博物館	企画展「パズル展」	4月18日～6月21日
北九州市立自然史・歴史博物館	炭都・三池～「明治日本の産業革命遺産」企画展2～	2月22日～3月22日
	春の特別展「まるごとウマ展～ウマと人のキズナ～」	3月20日～5月10日
佐賀県立宇宙科学館	春の企画展 ビーコロ2020	3月20日～5月10日

※次号(5月号)に掲載の5月6月の特別展情報は3月23日(月)までにお寄せください。

NEWOPEN

ニューオープン情報

館名：港区立みなと科学館

港区立みなと科学館は、虎ノ門に移転する気象庁・港区立教育センター（地下2階・地上14階）の1・2階に整備され、令和2年4月にオープンします。

『“まちに息づく科学”の発見と探究』をテーマに「知る・発見する」「出会う・気づく」「創る・探究する」「観る・驚く」の視点から、科学への興味・関心を触発する体験を提供します。実験室、常設展示コーナー、多目的ロビー、プラネタリウムホールを設置し、実験・工作や講座、クラブ活動、サイエンスカフェなど多彩な企画を展開します。小・中学校授業の一環としても展示室や実験室を利用することができます。プラネタリウムホール（直径15m、121席）では、光学式プラネタリウム+4K全天周デジタル映像システムのハイブリッドプラネタリウムで映し出される最新の宇宙観測データや宇宙開発などの話題を盛り込んだ番組、区の歴史と文化、観光資源などの魅力を発信するオリジナル番組を投影します。

また、2階では気象庁 気象科学館が併設しており、相互に自然科学・地球環境から都市型テーマの科学分野を補完します。港区の特色を活かし先端の科学技術を持つ研究機関や大学、企業と連携して、さまざまな取り組みを行なっていきたいと考えています。関係者の皆様と共に『まちと共に人々の成長を支える科学館』を目指します。

【延床面積】 1,254 m²

【公開日】 令和2年4月1日

【指定管理】 トータルメディア・東急コミュニティーみなと科学館運営グループ

【備考】 <https://www.minato-kagaku.tokyo>



TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向/教育用地学標本



since 1974

地学標本/化石・鉱物・岩石
古生物/レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)◆

Fossils, Minerals & Rocks

株式会社 東京サイエンス

TEL.03-3350-6725 FAX03-3350-6745

<http://www.tokyo-science.co.jp>

E-mail:info@tokyo-science.co.jp

〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

Practical Specimens for Study of Earth Science

Panasonic

パナソニックだから、
可能なソリューションがある。
映像からITシステムまで、パナソニックならではの技術力と商品力、
多種化する現代のビジネスニーズに
トータルソリューションでお応えします。



パナソニック システムソリューションズ ジャパン株式会社

Core Products

Security
Communication
Office
Infrastructure
Terminal System
AVC Network

Total Solution

マーケティング・セールス
システムインテグレーション
設置・施工
保守・メンテナンスサービス
クラウド・運用サービス

株式会社 パナソニックシステムソリューションズジャパン www.panasonic.com/jp/company/psj.html

学芸員専門研修アドバンストコースを今年も開講しました!

国立科学博物館 学習課 濱村 伸治

国立科学博物館では、全国の自然科学系博物館等に勤務する学芸員を対象に、一層の資質・向上を目的として、資料の収集・保管、調査研究、展示・学習支援活動等について専門的、実践的な学びにつながる研修を行っています。

例年異なる分野の2コースで実施をしており、令和元年度は植物コースと人類コースを11月11日～14日に開催しました。開催にあたっては、全国科学博物館協議会と国立科学博物館が主催をしており、今年度は全体で18名の方が参加されました。(協議会加盟館からは11館11名が参加されました。)

研修は4日間で行われ、各コースのテーマに関する専門的な講義と実践、そしてサイエンスコミュニケーションに関する講義で構成されています。



植物コース：
身近な地衣類の観察を行っている様子



人類コース：
人骨標本の取り扱いにかかる研修の様子

「標本庫を見る機会がなかなかないので、標本がどのように整理されているのか、整理の工夫等大変勉強になった。(植物コース参加者)」

「研究と業務を両立させる意義とその強み、さらにはその醍醐味を強く認識することができ、こうした視点を今後の研究活動・博物館活動に活かしていきたいと思う。(人類コース参加者)」

講義や実践、意見交換等を通じて、各博物館が活動の幅を広げたり、活動の見直し・点検につながるような内容となっています。令和2年度は、11月に動物コースと地学コースの開催を予定しております。ふるってご参加ください。

包み込まれるような映像体験。

Media Globe Σ

「Media Globe Σ 」は、最新の家庭用4Kテレビの、更に約4倍の高精細映像をお楽しみいただける、『8K』の投射解像度を持つ最新プロジェクタを搭載し、コニカミノルタの持つ先進の光学技術との融合により、高精細・高臨場感溢れる映像を、スクリーン全天に映し出します。



コニカミノルタ プラネタリウム株式会社 <http://www.konicaminolta.jp/planetarium/>

寄附の受付について

.....
全科協の活動を支援いただく寄附を随時承ります。

.....
申込み、お問い合わせは全科協事務局までご連絡
ください。

.....
みなさまのご支援ご協力をお待ちしております。
.....

ウシの胃 アルコール含浸標本



牛の博物館HP
<http://www.isop.ne.jp/atru/mhaku.html>

容量200リットルにもなる巨大な胃には、ウシの進化の秘密が詰まっています。ウシの食糧である草には、簡単には分解できない食物繊維が多く含まれていますが、4つに分かれた胃袋が分担してはたらくことで、繊維を徹底的に分解して栄養に変えます。ウシを含む反芻類の仲間は、高度に分化した胃を発達させて、草原への進出を可能にしました。現在、家畜となったウシがつくりだす肉や乳など栄養価の高い恵みも、この胃袋の賜物です。

牛の博物館では、ウシと人間との関係の、過去・現在を紹介し、その未来を考えます。

 次回執筆者は、群馬県立自然史博物館 姉崎 智子さんです。

令和元年度第2回理事会・総会及び 第27回研究発表大会を開催しました



第2回総会

令和2年2月13日、オーテピア・高知みらい科学館のご協力のもと令和元年度第2回理事会・総会を開催し、73館123名のみなさまにご参加いただきました。令和2年度の事業計画などの議事に続き、ご報告やご講演をいただき、大変学びの多い総会となりました。



会場館講演
(高橋 信裕 高知みらい科学館館長)

翌日の14日には同会場にて第27回研究発表大会を開催、130名のみなさまにご参加いただきました。「博物館の社会的役割を考える～持続可能性の視点から」という大会テーマに沿って、口頭18件、ポスター6件の事例発表と総括を行いました。

理事会・総会及び研究発表大会の開催には多くの方々にご協力いただきました。事務局より厚く御礼申し上げます。



全国科学博物館協議会

全科協ニュース編集委員

- 井島 真知(ベルナール・ビュフェ美術館学芸員)
- 大島 光春(神奈川県立生命の星・地球博物館主任学芸員)
- 西田 雅美(公益財団法人日本科学技術振興財団
科学技術館運営部主任)
- 島山 泰英(株式会社キウイラボ代表取締役)
- 平田慎一郎(きしわだ自然資料館学芸員(主幹))
- 弘田 澄人(かわさき宙と緑の科学館天文担当係長)
- 濱田 浄人(国立科学博物館連携推進・学習センター
連携推進課長)

全科協事務局

- 国立科学博物館
連携推進・学習センター 連携推進課
(担当:南部・片波見・苫米地)
- TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9898
info@jcs.jp
- 発行日 2020年3月1日
- 発行 全国科学博物館協議会 ©
〒110-8718
台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
- 印刷 株式会社セイコー社